

「その時・その場所」で感じることを、 そこから世界を考えること。

場所の歴史や特徴を生かした作品をつくるアーティスト

谷山 恭子



信濃大町 食とアートの回廊「滝の家」 photo 本郷毅史

小石が池の水面に投げ込まれる。小さくしぶきを上げ小石は水底へ、そして波紋はゆつくりと大きく広がりがり池の縁までとどく。大町護国神社という社に手を合わせた時に浮かんだイメージだ。

今年の春先のことである。長野県で新しく始まる芸術祭への参加依頼がきた。

北アルプスが正面に見える、水が豊富な信濃大町。町に降り立つてまず聞こえたのが町の中を流れる水路の水音。この水はどこからやってくるのだろうか、と水の流れてくる方向を見ると高い山々。水はあそこから来るのだな、と、なにも隠さずあからさまに地形が教えてくれる。最初の視察では町中と水路の上流を見て回り、木崎湖という美しい湖をぐるりと案内してもらって、フキノトウをつんで帰った。私はここで実際に何か作るのかな？と半信半疑な状態のまま、その時の印象から作品のスケッチを描いて提出した。

作品は、水路が家の中を走る民家の中に「滝」を作るという計画。タイトルは「滝の家」。「滝」にしようと思った理由は、大きな空と高い山から生まれた水とその恩恵を受けて生きる町、というランドスケープからひらめきを得て、「生活」と「循環」が隣り合っている風景を作りたいからだった。提案からしばらくして、作品を作るならもうギリギリだろうというタイミングのある日、作品を展示する空き家が見つかった、と連絡をもらい、急遽ことが動き出した。

で、以心伝心とでも言おうか、話が早くまとまりどんどんと道が開けていくのだった。

長年空き家だったとはいえず、突如家の中が工事現場のようになり、水浸しになったりしている様子に大家さんは目を白黒させて少々問題が起きたり、展示会が始まる前日、大雨で増水したため、ポンプを外して「滝」を解体するはめになったりしたが、とにかく初日の朝一〇時に「滝の家」は無事完成した。大胆に家の中を勢いよく落ちる滝は、豊富な水を生む北アルプスの自然のお陰、水博士達のお陰で完成した。

水路の上のお風呂場を解体した場所に、膜のように流れ落ちる滝。ちやぶ台の上に置かれた壺の中に勢い良くドドドと真つすぐに流れ落ち、床下へと消えて行く和室の滝。

水は浄化のために銅パイプを通して汲み上げた。そのパイプは墨汁で塗った黒い部屋の中でひっそりと鈍い光を放ち、冷たい水を通したパイプは、水滴を付着させていっそう美しかった。作品を観に来た人がパイプに触れた時、冷たくてこの中を水が通っているんだと実感した、と話していた。

そういうえば、初めてこの空き家に入り、水路を塞いでいた板を外し流れを確認した時、この小さな流れを通して、世界を覗き込むような感覚の作品が作りたい、と思った。そして、予期せず水路を流れるゴミから世界を考えることになった。そしてこのきれいな街から世界に発信できるように「暮らし方」を提案できたら素敵だと思った。例えば、独自の流通を作り、プラスチックやビニールを出来る限り使わず、ゴミにならない素材を利用するとか。それに伴い地域に新しい仕事も生まれるだろう。そんなことを、大町の市議員さんに話したりした。



同上 photo 谷山恭子

制作に入る初日に水路の源泉近くの「布引滝(ぬのびきのたき)」を見に行くことにした。七月上旬の雨の日、ガイドさんの案内で直接沢を登るルートで滝に向かった。森林の中、霧のけぶる沢登りは神秘的だったが、聞く所によるとこの季節は誰も登らないそうだ。五月の山菜採りの時に登る人がいるくらいで、七月に登ろうなんて物好きしかやらないらしい。納得。道中藪の生い茂る七月の山には驚くほどのブヨが飛び、かなり登りにくく少し進むにも時間がかかった。結局時間切れで滝には行き着けなかったが、水の湧き出ているところは見た。沢の水音がぐぐもったと思っただらそこで水が消えていた。下界の町中を流れる水の生まれる場所を見た、という満足感が気持ちよかった。

翌日から会場となる空き家の掃除を始めた。掃除を始めて数日経ったある日、若王子神社のお札が出てきた。大町の氏神様だ。ここに挨拶に行かなきゃ、と思い、自転車を借りてすぐに出掛けた。そこに大町護国神社があった。

源泉も体験したし、お参りにも行ったし、家も掃除した。さて、水路の水を汲み上げて滝をつくらうか、と色々方法を考えていた時にシヨクシヨクな出来事が発覚した。「きれいな清流」と言われていた水路には実は様々なゴミが日々流れ、一部の家庭からの生活雑排水も流れ込んでいる、という地元の方にもあまり知られていない事実。水路を利用してダムを作り、水を二階に汲み上げ

観る人にとっても、この小さな民家の中に作られた作品が、広い世界へと視線を向けるきっかけとなることを期待している。

「滝の家」が、誰かにとって、大町護国神社で見た、水面に波紋を描く小石のような存在になったとしたら嬉しい。今居るこの場所を知り体験することから、私達の住む世界、地球について考えたい。それが、いつも私が作品を通して発信したいメッセージなのだと思える機会となった。

自然落下させる、という計画だが、まずゴミに悩まされた。毎日流れてくるプラスチックやビニールや残飯がポンプ周辺や、ダムにするために配置した石にひっかか。ひっかかったゴミが閥になって水位が上がることしばしば。毎朝五時からゴミ拾い。川の上流の町にしてこの状態、じゃあ日本や世界はいったいどうなっているの？と考え込んでしまった。芸術祭のアドバイザーである北川フラム氏の助言もあり、ゴミを見せて問題提起をすることにした。アートの「町おこし」という考えが増えている昨今、実はそこで展示会をすることに對して疑問に思うこともあったが、今回はゴミの問題に直面したことがきっかけとなっていて、自分がここ大町に居る理由に触れた感じがして違和感が少し緩和された。

次に、「滝」らしい水の流れ方についての検討を始めた。最初の実験は水が飛散し家の中を水浸しにしてしま。うわ、滝らしくないわ、で大失敗。ぐったりと気分が落ち込んでいたそんな時、事務局スタッフの息子さんと中学二年生の男の子がやってきた。彼は水流オタクで、小さい頃からずっと水の流れを見ていたそうだ。理系の彼は頭が良く、私が作った試作品の水槽を利用してどんどんアイデアやヒントを出してくれた。そして驚くスピードで「滝」の仕組みを編み出していった。私は自分の中で彼を水博士と命名し、今回のテクニカルアドバイザーに任命した。子供の力は素晴らしい。彼の兄妹もたまに顔を覗かせて水を触って遊ぶ。彼らが触ると水は躍動的に動き、家は水浸しに。でも同時にそれを私が見て私の心は自由になっていった。

水の実験を繰り返すたび、だんだんと私の中でも「滝」のイメージが具体的になり、水の勢いや表情に対する価値観も出来てきた。そして不思議なことに、水博士やその兄弟ともその価値観が一致しているよう



photo 小野順平

場所の歴史や特徴を生かした作品をつくるアーティスト

谷山 恭子

愛知県出身東京在住。
武蔵野美術大学造形学部修士課程修了。

- 2001年 美術館を読み解く(東京国立博物館)
- 2007年 カスヤの森現代美術館(神奈川)
- 2010/13年 瀬戸内国際芸術祭(香川)
- 2012-13年 Asian Cultural Council Fellowship
- 2014年 信濃大町 食とアートの回廊

その他、多数の芸術祭に参加

背景写真は、箱根彫刻の森美術館 ミーツ・アートー 森の玉手箱 "Here today 今日、ここ"